

いつか友達でなくなる日まで

衿 さやか

二歳九ヶ月の姪がいます。姪がこの世界にやってきてからというもの、知らなかったこと、知らなかった感情を本当にたくさん知ることができています。自分には子どもはおらず、子どもと接する仕事をしたこともないので、私にとって「子どもという生き物」は姪が初めての存在です。いままで、どこかで、なんとなく、子どもというのは大人の進化前で、子どもと接するというのは「成長を見守る」という行為だと思っていました。乱暴な言い方をすれば、大人の方が立場が上である、と。しかし、姪と時間を過ごすうちに、どこかその言葉がしっくりこないことに気がつきました。言うならば、「異なる価値視点を得た」とか「人間関係が広がった」とか、それを総合的に考えると、どうにも「新しい友達ができた」というのが私たちのあいだにはしっくりくる言葉のように思えるのです。

ほかの二歳の子どもたちがどうであるかはわかりませんが、姪はおしゃべりが好きです。大人のお手伝いが好きです。お友達を助けてあげることが好きです。ごはんが好きです。お姫様が大好きで、自分のことを「プリンセス」だと名乗るのです。姪の思うお姫様は決して受動的ではなく、悪（というものが彼女の概念の中にあるのだとすれば）と立ち向かい、そしてそれを成敗するのではなく、共に善き心で生きてゆこう、といった世界観なのです。

私自身も「プリンセス・姪」の母親である私の妹も、まったくそんなことはなかったのに……。お手伝いなど、やらなくていいのであればまったくやりたくないと思っていたし、お友達のことを助けるどころか、自分のことで精一杯でした。というか、いま現在もそう思っています。人を助け、悪を論じ、共に生きてゆくなんて……かなりめんどうだし、負担が大きいことです。よその悪にかまっていられるほど私には余裕がありません。プリンセスの母に確認したところ、彼女も同じ気持ちでした。今まで生きてきて、大人のお手伝いをしたと思うところなど一度もない、と（情けなく断言できるわれわれ姉妹がじゅうぶんすぎるほどに大人であるということは大前提として）。しかし、プリンセスは違うのです。彼女は、私の妹と義弟の娘であるまえに、ひとりの人間なのです。好きなことがあり、嫌いなことがあり、したいことがあり、したくないことがあります。当然のことです。だから、新しい価値観を持つ友人が増えたような、そういう不思議な感覚に陥るのかも知れません。姪は、自分の母がそうするように、伯母である私のことを名前呼びます（それも呼び捨てで）。

姪とふたりで遊んでいるとき、彼女が言いました。「サヤはメイちゃんのおともだちだからね」「そうなの？　メイちゃんママのお友達じゃなくて？」「ちがうよ、サヤはメイちゃんのおともだち」。自分より数倍体積の大きな人間である私のことを、彼女は「ともだち」であると断言したのです。「だからほいくえんいっしょにいてもいいよ。メイちゃんがおしえてあげるから」と誘ってくれました。うつで長らく休職している私は、大人なのに、平日の、変な時間に姪に会うことができていました。「ばばとままはおしごと。しゅっちょうもあるよ。しんかんせんのるんだって。じーじとばーばもおしごとかおでかけ」という認識を持つ彼女にとって、いつもよくわからないタイミンで現れる、いつもパジャマみたいな服装で、しかしおもちやお菓子をたびたび買って来て、公園では砂遊びをし、電車ごっこをし、家ではピアノを弾いて歌をうたい、読みたいだけ絵本を読んでもくれる青白い顔をした中年女性は、その目にどう映っているのでしょうか。それから度々、私は彼女に質問をします。「サヤはメイちゃんのお友達？」「そうだよ！　メイち

やんのおうちにはぴんくのおふんとしろいおふとんがあるから、サヤはぴんくのおふとんでねたらいいじゃない？ メイちゃんといっしょに。あそびにきたらいいじゃない？」と彼女は答えます。

妹夫婦や自分の両親が仕事や余暇に励んだり楽しんだりしているなか、プリンセスがこの世界にやってきてからの三年弱、私は本当になにもしていませんでした。楽しみもなく、つらい気持ちのことのほうがとても多かったです。だから、なにもしていない、なにもできていない自分のことをずっと恥じていたのです。でも、姪にとつて、私は、大勢いる友達の中のひとり。保育園にいるララちゃんやレンくんやハルちゃんと同じ。お友達のなかのひとりなのです。だから、私が元気なさげに寝込んでいると「だいじょうぶ！」と励ましてくれるし、そのあと起きてぼーっとしていると「なんでずっとねてるんだよ！」と限りなく叱咤寄りの激励をされます。そのあと「ねえ、おけしようしたほうがかわいいんじゃない？」などというものすごく的確なことを言われ、痛いところを突かれています。病人だからと甘やかさず、特別扱いもしません。女の子はお化粧をした方が可愛いし、一緒に遊びたいんだからいつまでも寝てないでよね、と、彼女は思っているのです。

ふたりに公園に行ったときのこと。すべり台に誘われ、お尻が窮屈そうだなと思った私は、その誘いに渋っていました。すると「だいじょうぶ！ できるよ！ なんてさいしょからできないっておもうの！」と諭され、「メイちゃんについてきて！」と彼女は頼もしく宣言します。よたよたと青白い顔の中年女性は、走り出したら止まらないプリンセスのあとを追います。すべり台の幅は思ったより余裕があつて、お尻もちゃんと入り、そして思わぬスピードが出ました。何十年ぶりのかすべり台は、とても速く、誰もいない小さな公園で、姪と私の遊ぶ声だけがよく響く、乾いてよく晴れた冬の午後でした。「メイちゃん、だっこしてあげるから、すべっておいで！」との言葉通り、すべり台の下では姪が両手を広げて待ってくれています。私たちは、友達なのです。ただの、友達なのです。そのあと誘われたブランコで中年女性の三半規管は限界を迎え、ついでお尻の幅もすべり台ほど余裕がなく、すぐに諦めてしまいました。私はあの午後に忘れないだろうな、と思います。

二歳や三歳の子どもの、一般的な発育や、成長過程などを私は知りません。だけど、おそらく姪は平均よりは身長が高く、活動的な性格で、よく眠りよく食べ、おしゃべりも好きなのではないかな、と感じます。だから、今、自分が友達だと認識しているこの人間が、自分の母親の姉であるということを理解する日は、そう遠くはないでしょう。

ヴァージニア・ウルフの「灯台へ」（鴻巣友季子訳・新潮文庫）にこんな言葉がありました。

——ことばは井戸の中を落ちていくかのようで、水にはものをひどくねじ曲げる力もあるから、もし井戸水が澄んでいれば、ことばが下へ落ちていく途中で早くもねじれにねじれてしまうのが見えたらう。子どもの心という井戸底につくころには、どんな形を描いているか知れたものではない——

しかしそののちに、またこういう言葉も綴られています。

——子どもというのは、決して忘れない。だからこそ、人の言うことなすことにはいちいち気をつけなくてはいけない——

姪は、私と「友達」として過ごした時間のことを、きっと忘れてしまうでしょう。そんなに遠くない未来に。そしてまた、私たちが「友達」であったことをも。私のことを「伯母」だと認識したとき、私たちは正式に「友達」ではなくなります。だけど、それと同時に、決して忘れない、のではないか、とも私は思うのです。きっと忘れてしまう、だけど忘れないだろう。私とプリンセスは、そう遠くない未来に、「友達」ではなくなります。プリンセスは「お手伝い」ではなく、自分で自分の人生を切り拓いていきます。そしていつか（これは少し遠い話かもしれないけれど）、あのとき伯母が病を患っていたこと、そんなとき自分という小さな生命体の存在がどれだけ救いになったかということ、自分が存在しているだけで伯母が生きていく活力を得ていたこと、いつかそれを知るのかもしれない。私が今日、ここにこのエッセイを記したことで（きっと彼女が読むなんてことはないだろうけど）これは確かなものになります。

姪が生まれてきてくれてよかったなといたって単純な気持ちで、私はそう思っています。いつか「友達」でなくなる日まで、私は新しい友人と精一杯楽しい時間を過ごしたいし、「伯母と姪」になる日が来れば、またそこから目一杯の愛情を注ぐ（と、書きかけで、それはとても傲慢だと感じた）、のではなく、楽しい時間を過ごしたいと思っています。いつか友達でなくなるその日まで。